（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	本宮　裕示郎
論文題目	19 世紀イギリスにおける自由教育論争に関する研究――教養概念をめぐる T. H. ハクスリーと M. アーノルドの論争に焦点を合わせて――		

（論文内容の要旨）

本論文は、T. H. ハクスリーと M. アーノルドの論争に焦点を合わせて、19 世紀イギリスの自由教育（liberal education）論争を再整理し、両者が提示した教養（culture）概念の意義と課題を明らかにするものである。

社会階級によって受けられる教育が規定されていた 19 世紀中頃のイギリスでは、自由教育とはエリート教育と同義であり、人文主義的な教育を意味した。しかし、古典語の暗記ばかりが繰り返される自由教育の状況に対して、その存在意義を疑問視する声が挙げられていた。他方、イギリスに先駆けて科学教育を取り入れていたドイツやフランスの産業・工業面での急激な発展や、実用性を重視し科学的知識の普及を訴える H. スペンサーの主張をきっかけにして、自由教育に科学教育を導入すべきという声も高まっていた。その結果、自由教育の目的や内容をめぐって、主として、科学教育を推進する立場と文学教育を擁護する立場の対立として、自由教育論争が引き起こされた。なかでも、ハクスリーとアーノルドは、科学と文学をそれぞれ代表する論者として、論文や講演を通じて論争を繰り広げた。

国内外の先行研究では、ハクスリーとアーノルドの間で生じた論争を主な手掛かりにして、教養概念をめぐる両者の思想の比較検討がさまざまな角度から行われてきた。しかし、先行研究では、ハクスリーとアーノルドが従来の自由教育に対して共通に抱いていた問題意識は見逃され、自由教育論争において両者の論争が果たした役割も明らかにされていない。ハクスリーとアーノルドが人生批評としての教養概念に込めていた期待も考察の対象とはならず、両者が提起した教養概念の意義を十分に検討することはできていない。

本論文ではまず、自由教育論争全体におけるハクスリーとアーノルドの位置づけを整理した（第 1 章）うえで、両者の論争に焦点化し、「古代ギリシャの精神」との関わりから両者の教養概念が比較検討される（第 2 章）。次いで、道徳性の涵養という観点から、科学に関するハクスリーとアーノルドの思想的な変遷が確認される（第 3・4 章）。最後に、ハクスリーとアーノルドそれぞれの初等教育カリキュラム論にもとづいて、両者の教養概念がカリキュラム・レベルで比較検討される（第 5 章）。これらの共時的・通時的かつ理論的・実践的な比較検討をもとに、「人間とは何か」、「真・善・美と実用性をどのように架橋するのか」、「どのような道徳性をどのように涵養するのか」といった問いに対する両者の答えを整理し、それぞれが教養概念として掲げた人生批評の中身が明らかにされる。

終章では、各章の成果が整理され、両者の教養概念のイギリスの自由教育の思想史における位置づけが再検討される。ハクスリーとアーノルドは、「古代ギリシャの精神」の再興をともに求め、真実を絶えず追求するなかで、道徳的な行為として知が表現されると考えていた。ハクスリーは、自然の事実のなかに真実を見いだし、自然法則を絶えず追求することによって、道徳法則が導かれると考えていた。一方、アーノルドは、自分自身のなかに真実を見いだし、最善の自己を絶えず追求することを道徳的な行為と見なしていた。両者ともに、真実を介して、知の追求と知の表現を両立させる論理を組み立てようとしており、その両立を可能にするものこそ、知の体系として知性と道徳性をともに涵養する教養概念であった。しかし、両者は、「いかにして生きるのか」を問う人生批評という名の教養概念をともに掲げながら、ハクスリーは世

界との調和のあり方を示し、アーノルドは自己との調和のあり方を示すものであり、両者の教養概念は対立的ではなく相補的に、イギリスの伝統的な自由教育を象徴していたのであった。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、T. H. ハクスリーと M. アーノルドの論争に焦点を合わせて、19 世紀イギリスの自由教育論争を再整理し、両者が提示した教養概念の意義と課題を明らかにするものである。

社会階級によって受けられる教育が規定されていた 19 世紀中頃のイギリスでは、自由教育とはエリート教育と同義であり、人文主義的な教育を意味した。しかし、古典語の暗記ばかりが繰り返される自由教育の状況に対して、その存在意義を疑問視する声が挙げられていた。他方、イギリスに先駆けて科学教育を取り入れていたドイツやフランスの産業・工業面での急激な発展や、実用性を重視し科学的知識の普及を訴える H. スペンサーの主張をきっかけにして、自由教育に科学教育を導入すべきという声も高まっていた。その結果、自由教育の目的や内容をめぐって、主として、科学教育を推進する立場と文学教育を擁護する立場の対立として、当時の知識人により、自由教育論争が引き起こされた。なかでも、ハクスリーとアーノルドは、科学と文学をそれぞれ代表する論者として、論文や講演を通じて論争を繰り広げた。

ハクスリー、アーノルドそれぞれの思想を検討した研究や、自由教育論争を検討した研究については、国内外で分厚い先行研究がある。これに対して本研究は、ハクスリーとアーノルドそれぞれの教育思想と教養概念を、両者に通底する問題意識をふまえて丁寧に明らかにするとともに、それぞれが提起した初等カリキュラムの改革構想をも検討することを通して、科学教育推進と文学教育擁護の対立という解釈を問い直し、両者の自由教育史上の位置づけを再定位するものである。

本論文の成果としては、主として次の二点を挙げることができる。

一つ目の成果は、教養概念に注目しつつハクスリーとアーノルドの論争が自由教育論争で占める位置、および両者の思想の解釈を再検討した点にある。本研究では、多くの先行研究のように、自由教育論争を科学と文学の対立とみなし、両者の区別を強調するのではなく、ハクスリーとアーノルドの論争を成り立たせていた共通の問題意識に着目している。すなわち、両者の土台には、人間性の全体的・調和的な発展による自由人の育成という「古代ギリシャの精神」の再興をめざし、形骸化した自由教育を改革するという問題意識があった。すなわち、当時、実用性を伴って発展してきた科学の価値の高まりに対して、「人生批評」という教養概念の本質をどう再構築するかという点では、両者の間には共通性があった。しかしながら、ハクスリーは、真となる自然法則から、善・美・実用性が導かれると考え、自然法則を見いだすことを可能にする科学教育の重要性を強調した。対して、アーノルドは、実用性の過度な要求によって、社会に無秩序が生じたことを問題視し、秩序を取り戻すために、真・善・美を兼ね備えた優れた詩歌をはじめとする文学教育を求めた。このような本研究の成果は、科学重視と文学重視といった論点で自由教育論争を捉える先行研究の見方に対して、本質的な論点の所在を提起するものである。また、科学と道徳性との関係に関して、両者の思想的変遷における転換を強調する先行研究の見方に対して、それぞれの思想において通時的に何が変化し、何が一貫していたのかを論証したものでもある。

二つ目の成果は、ハクスリーとアーノルドの初等教育カリキュラム論を比較検討し、すべての子どもが教養を身につけるためのカリキュラムという実践的な側面から両者の異同を整理した点である。先行研究では、両者が提示したカリキュラムは表面的には一致していると判断されてきた。しかし、科目構成を実際に比べると、表面的にも一致は見られず、ハクスリーが、子どもたちの生活のリアルを直視し、当時直面していた実際的な課題への対処も視野に入れたカリキュラムを構想していたのに対して、アーノルドは、いわばカリキュラムにロマンを抱き、実際の生活とは一線を

画す、精神的な向上を一貫して求めており、両者は異なるカリキュラム観を抱いていた点が明らかにされた。さらに、ハクスリーは、さまざまな科目の基礎としての役割を科学に与え、アーノルドは、さまざまな科目を統合する役割を文学に与えていたというカリキュラム編成原理における相違点も明らかにされている。

試問においては、以下のような点が指摘された。

思想史的な脈絡のみならず、制度面や社会構造面での歴史的条件をふまえて、自由教育論争の歴史的固有性やその後の教育制度や教育実践に与えた歴史的意味が考察される必要があったのではないか。本論文の現代的、実践的示唆はどのような点にあるのか、現代にもつながるいかなる本質的な論点を追求したのかがより明示化される必要があるのではないか。

このように本論文には今後の課題も残されているものの、それらは本論文の学問的意義を損なうものではなく、むしろ今後の研究の発展可能性を示すものであり、試問においても適切な応答がなされた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和 4 年 2 月 18 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、期間未定の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降